

一 般 演 題 抄 錄

25. 3次元耳下腺造影 CT (3D-sialo) の試み

森上智恵美 小坂正明 真鍋幸嗣 上石 弘
近畿大学医学部附属病院形成外科

はじめに

耳下腺腫瘍の診断において、耳下腺造影は重要な情報源です。しかし従来の耳下腺造影は平面的な描写であるため、立体的に把握するのは難しい。その後耳下腺造影はCTと組み合わせてCT-sialographyとして発展したが、十数枚のスライス画像を頭の中で立体構築しなければならず、煩雑な作業が問題である。

また、そのため手術に直結しにくく、画像を理解するには経験を要するなどの、欠点があった。そこで近代急速に進歩している3DCTを応用し、立体的耳下腺造影を試みた。

方 法

通常のsialo-CTと同じく、リピオドール2ccを注入した直後に3D-CTとして撮影する

結 果

耳下腺内に造影されないtumor massを3次元的に認めた

考 察

3D-sialoでは、1) 1枚の画像で診断が可能 2) 3次元把握が容易である 3) 手術計画に直結している 4) 特別な経験やセンスを要しないなどの、利点あげられ従来の欠点を改善した、新しい手技であると思われる有用であった。

26. 気管支喘息患者末梢血単核球のサイトカイン産生に対するテオフィリンの影響

仲原 弘 東田有智 久保裕一 原口龍太 田中 明 南部泰孝 植島久雄
岩永賢司 村木正人 野上壽二 長坂行雄 大石光雄 福岡正博 中島重徳*

近畿大学医学部第4内科学教室 *ライフサイエンス研究所

テオフィリンは気管支喘息の治療において気管支拡張剤として現在でも広く使用されている。だが最近ではこの拡張作用以外の抗炎症作用という点について注目されている。そこで、我々は特異抗原刺激による単核球からの各種サイトカイン産生能に対するテオフィリンの影響について検討した。

方 法

ダニ喘息患者 (IgE RAST score ≥ 3) よりヘパリン加にて末梢血を採取、単核球を分離 4×10^6 個/ml に調整、ダニ抗原を10 mg/ml 添加した群をコントロールとし、さらにテオフィリン10 μ g/ml 添加した群をテオフィリン群とし、それぞれを37°C, 5% CO₂ 条件下にて72時間培養し、培養後上清を採取し sandwich ELISA 法にてサイトカインを測定した。

結 果

テオフィリン添加群はコントロール群に比較して培養後上清中のIL-4, IL-3, IL-5, GM-CSFの産

生を有意に抑制していた。しかし、テオフィリン添加群はコントロール群に比較してIL-2の産生に影響を及ぼさなかった。

考 察

テオフィリンは特異抗原により誘導されたTh2細胞からのIL-4の産生を抑制することによりB細胞からのIgE産生を抑制し、1型アレルギー反応を抑制する可能性が示唆された。又、テオフィリンは好酸球の遊走、活性に関与するIL-3, IL-5, GM-CSFの産生を抑制することによりLARさらには慢性炎症とされる気管支喘息の基本病態をも抑制することが示唆された。以上のことよりテオフィリンはadenylatecyclase系のphosphodiesteraseを抑制し気管支拡張作用を有するだけでなく、Th2系の各種サイトカインをも抑制して気管支喘息の治療薬として有用な薬剤であることが示唆された。